

日本環境動物昆虫学会 第 21 回年次大会報告

安部 八洲男

平成 21 年の 11 月 14 日（土）と 15 日（日）の両日に、本学箕面キャンパスにおいて日本環境動物昆虫学会・第 21 回年次大会（大会委員長：本学教授 安部八洲男氏）が開催された。その概略を報告する。

1. 一般講演およびポスター発表

一般講演は本学2号館の3階と4階の二会場に分かれて行われ、朝早くから各会場とも熱心な質疑応答があった。全部で40題の研究発表があった。本学から、八段晃一・樋上侑季・藤沢健司・安部八洲男による研究「飲料自販機内に侵入した昆虫類とそれらが運ぶ食中毒原因菌の調査」を発表した。この発表を朝日新聞社が目し、11月13日夕刊の記事にした。この為、自販機業界、飲料販売業界など各所で反響があった。

ポスターも16題の発表があり、2ヶ所に分かれて掲示した。

一般講演およびポスター発表者の中から、30歳未満の若手研究者を奨励する「優秀講演発表賞」の選考があり、下記二名が受賞された。

- 1) 一般講演の部：江口秀範氏（住化エンビロサイエンス株式会社）「ダニアレルゲン低濃度測定法」
- 2) ポスターの部：堀 祐規氏（滋賀県立大学）「ヒロヘリアオイガラの繭発生量の年次変動と生命表分析」

2. 学会賞受賞講演

吉村 剛氏（京都大学生存圏研究所）による氏の長年の研究の成果をまとめた「シロアリの生態とその防除方法に関する研究」が本学会の学会賞を受賞し、その内容の受賞講演があった。

3. 市民公開セミナー

14日（土）の午後1時から学会主催の市民公開セミナー（入場無料）が開催された。当日の午前中は小雨もようであり、参加者が少なくなるのではないかと心配させたが、雨は昼近くには止み、近縁の一般市民や高校教諭などを含め約100名の参加者があった。本セミナーは特別講演の演題「大阪の食文化の成り立ち」やシンポジウムのテーマ「地球温暖化と害虫防除」が一般市民に身近であったため、参加者は熱心に聞いておられた。

プログラムは下記のとおり：

1) 特別講演

「大阪の食文化の成り立ち」藤原政嘉氏（大阪青山大学健康科学部）

公家社会が育てた「京料理」とは異なり、大阪の食文化は、大阪商人を中心としてその基礎が育成された。それから発展し、お好み焼き、しゃぶしゃぶ、たこ焼き、どて焼き、ホルモン焼きなど数々の庶民の食べ物が大阪から発進された。大阪の食文化は無駄を出さない、すぐに食べられる、一口で種々の食感・味を感じられるなどに特徴があると話された。

2) シンポジウム

テーマ “地球温暖化と害虫防除”

- ①「マラリア対策とオリセットネット（薬剤含浸蚊帳）」伊藤高明氏（住友化学株式会社）

現在のWHOによるマラリア対策の重要な手段の一つであるオリセットネット（薬剤含浸蚊帳）について、多くの写真を使って判りやすく解説された。

②「トコジラミの復活 駆除は難しい？」渡辺 護氏（元・富山県衛生研究所）

1970年頃には、ほとんどわが国で見られなくなったトコジラミによる被害が2000年代になって再び吸血被害事例が散発するようになった。渡辺氏がいろいろ試験された結果では、現在一般的に使用されている殺虫剤では簡単に駆除できないと報告された。

③「地球温暖化と節足動物媒介性感染症」小林睦生氏（国立感染症研究所昆虫医科学部）

2007年にチクングニア熱が北イタリアで流行し、300名の患者が発生し、1人が死亡した。これはヒトスジシマカが媒介する熱帯病の一つである。日本でも気候が温暖化すると共にヒトスジシマカの分布は北上し、いまでは青森県以南の都市部に普通に生息しているヤブ蚊となっている。近年、東南アジアと日本との人の行き来を考えると、日本にも熱帯病が侵入してもおかしくない状況になりつつあると説明された。



特別講演中の本学教授 藤原政嘉 氏



受賞講演中の京都大学 吉村 剛 氏

4. 佐々学 特別展

日本の衛生動物学界を草創期から指導してこられた佐々 学先生（東京大学名誉教授，1916-2006）の生涯をパネルで展示し、解説したものである。これらのパネルは、この年次大会の為に佐々 学記念館より提供された。

5. 懇親会

本学“いなホール”で夕方5時半より立食パーティーによる懇親会が開かれた。当初予想を上回る約70名の参加者があった。

冒頭に本学学長塩川和子氏より「ようこそ本学箕面キャンパスにいらっしゃいました」と歓迎の言葉とともに「日本環境動物昆虫学会の今後の発展を祈る」との祝辞が述べられた。

食事とアルコールで歓談の合間に、標高約150mの高台にある箕面キャンパスから見下ろす大阪平野のきれいな夜景のすばらしさに、「まるで宝石をちりばめたような！」と参加者一同から感嘆の声が聞こえた。



懇親会で挨拶中の本学 塩川和子 学長



懇親会風景

昆虫入りやすい?飲料自販機 大阪青山大調査

飲料自動販売機内には体長7mm以下の昆虫類が入り込むことを、大阪青山大学(大阪府箕面市)のグループが確かめた。14日に同大で開かれる日本環境動物昆虫学会で発表する。昆虫の一部からは食中毒の原因菌も検出されたという。

大阪青山大健康科学部の安部八洲男教授らは、大阪府内の屋内3台、屋外2台の計5台の自動販売機内部に、粘着式の虫トラップ(わな)各4個を5月18日から8日間設置した。また、屋内の別な自販機1台の外部底面にも4個仕掛けた。

その結果、トラップを内部に設置した5台ではコバエ類70匹や黒ゴキ

ブリの幼虫など昆虫類計78匹が捕まった。外部に取り付けた自販機では69匹。内部にいた昆虫はいずれも体長が7mm以下で、最も多かったのは2mm以下のコバエ類だった。

これらの昆虫の一部で体表の微生物を調べたところ、黒ゴキブリの幼虫から食中毒の原因となるサルモネラ菌が検出されるなど細菌類が確認された。

サルモネラ菌は少量を摂取しても食中毒は発症しないとされるが、安部さんは「紙コップ方式の場合、昆虫類が自販機に侵入すれば汚染される可能性はある」としている。

(鍛冶信太郎)

朝日新聞(2009年11月13日)に掲載された学会記事